第8編　土木学会と私——80周年に寄せて

まえがき

第8編は「土木学会の80年」の流れの中で，1945年から94年に至る半世紀の間の思い出や出来事を側面から記述した文章42編で構成されている．内容，執筆者とも多彩であるが，テーマおよび執筆者の選定は編集委員会の責任で行った．学会史の別な一面として本文およびコラムと併読されれば，それぞれの背景が明らかとなろう．僅かな頁数の中で短期間に取りまとめていただいた執筆者各位のご尽力に対し深い謝意を表したい．登載順位は，ほぼ時代区分によっている．

1．戦時中の特異な思い出一，二

河上　房義



戦中戦後の学会活動について執筆する依頼を受けた．私は昭和20年度の理事であったが，当時の学会活動の全般については知らないので，私の関係した二つの事について先輩各位の活動の一端を紹介して責を果たそう．

（1）　吹上御苑地下の耐弾構造物の建設*

1941（昭和16）年6月から4か月余の間に，皇居吹上御苑の地下に重要会議に使用された耐弾構造物（御文庫付属室と呼ばれた）が建造され，日米開戦の直前に竣功した．

その構造の詳細について述べる余裕を持たないが，数トン爆弾一発の直撃に耐えるよう考えられていた．

厚さ5mのコンクリート造の天蓋と側壁の設計に当たり，私は東大に吉田徳次郎先生をお訪ねしたところ，先生はマジノ要塞（フランス）における耐弾コンクリート部の配筋やクレーンによる施工状況の工事写真（雑誌の切抜き）を示されながら丁寧に教えて下さり，先生の博識に今更ながら感服した次第である．

（2）　航空基地の急速設定への努力

1942年秋には，太平洋戦争の勝敗は航空基地設定の速さに支配されると考えられた．南太平洋でも人力に依存して基地を設定していた我が国と，ブルドーザーやショベル等の重土工機械を駆使して2週間足らずで制空権を手中にしていた米軍との建設速度の差は，数十倍にも及ぶといわれた．当時南太平洋からの戦利品であるブルドーザーを始めて見たという関係者さえいた．

陸軍でも建設機械の開発，実地の訓練，試験施工のため，1943年3月に陸軍飛行場設定練習部という機関も設置された．

そのころ技術院を始めとする官・軍・民間メーカー，その他関係学協会等が総力を挙げて航空基地設定用の大型土工および運搬器材等の開発とその運用の研究が進められた．大学や関係学協会でも東大，京大，北大等の土木関係の諸先生の絶大な協力があったが，この分野の歴史の浅いこともあり期待されたような成果は収められなかった．

*土木学会編：土木工学の概観，日本学術振興会 1950.12，437頁

（名誉会員　工博　東北大学名誉教授）

2．『建設ニュース』発行の思い出

福岡　正巳

終戦当時土木学会の事務所は有楽町のユニオン館（富国生命）の一階にあり，中村孫一氏が書記長をしておられました．復員した元気のよい若い人たちが事務所に集まりましたが，そこで学会は会費をとるばかりで，会員のために何もしていないではないか，たとえ1枚でも印刷物を発行して会員に配ってはどうかという意見が出され早速実行に移すことになりました．このとき中心になら



れたのは左合正雄，大塚全一の両先生でした．紙は割り当て制になっていましたので，大塚先生が商工省（通産省）と交渉してくださいましたが結局学会にあったものを使うようになったのではないかと思います．

印刷してくれるところがないということでしたから，私は女子学習院の中等科の校長をしておられた射手矢貞三先生にご相談をしました．先生は毎日新聞の主筆，永戸政治氏を紹介して下さいました．永戸主筆は毎日新聞と関係の深い下野新聞社に印刷してくれるよう頼んで下さいました．

原稿は大塚，左合の両先輩が集めて下さいました．私も土木試験所の英文の雑誌にのっていたパンアメリカンハイウェーの記事を書きました．

ロール巻きの紙をリュックサックに詰め，満員電車に乗って宇都宮に行きました．下野新聞社は駅から歩いて約20分のところにありましたが，途中は一面焼野原でした．新聞社の建物は小さな町工場のようで，狭い部屋に輪転機がポツンと置いてありました．割り付けと校正は手伝いましたが，植字から印刷までは職員の方が担当してくれました．紙型はグリーンのプラスチックの板でした．21年の夏に印刷が終わりました．食糧難時代でしたから帰りにかんぴょうとかぼちゃを買って帰りました．しかし，やみ米を買った記憶はありません．

建設ニュースは1号で終わりましたが，永戸主筆には遂にお目にかかる機会もなく，お礼にも行かず，失礼してしまったことが，いつまでも気がかりになっていました（**第4編 4.1.1** 参照）．

（名誉会員　工博　元国際土質工学会会長　元新聞編輯委員）

3. 土木学会の憶い出

本間　仁



私が学校を出て土木学会に入ったのは1930年で，学会の事務所は丸ノ内の富国徴兵保険とかいう会社の建物の一階にあった．

小さいけれども比較的きれいなビルで，階下にはレストラントがあった．

そのころの学会誌というのは，ほとんど論文集と言うべきものであった．1933年に三陸の大津波があり，勤めていた内務省土木試験所では，先輩の松尾春雄さん（後の九大教授）が調査に行かれ，報告書を出すについて，小さい実験を行われた．私も少しお手伝いをしたついでに理論解析をしてそれを学会誌に投稿したところ，採用されて丸善の万年筆か何かを頂いた．これに味を占めてその後毎年のように投稿して，丸善の文房具類を頂いた．

そのころの学会はクラブのような感じで，夕方の委員会の後で下のレストラントでご馳走になったこともあった．

ところが戦争が激しくなって，この場所は使えなくなり，学会の事務所も一，二か所転々と（注：1946年にGHQに接収）して，ついに東京駅に近い国電のガード下で，破れ天井を通して電車の轟音を頭上に聞きながら，水理公式集の委員会など，敗戦国のわびしさが身に沁みる，思い出の時代があった（**第4編** 参照）．

注：カットは「本間仁：水のほとり（1987年10月）」自筆スケッチより著者の了承を得て使用したものである．

（名誉会員　工博　東京大学名誉教授）

4. ガード下で結実したコンクリート標準示方書

國分　正胤



我が国における鉄筋コンクリートの活用は意外に伸びなかった．しかし1923(大正12)年の関東大震災により，その長所が明らかにされて以来，利用が飛躍的に拡大されたので，1931（昭和6）年に　土木学会鉄筋コンクリート標準示方書* が制定された．吉田徳次郎先生は九州大学から東京大学教授に轉任され，1939(昭和14)年から鉄筋コンクリート標準示方書委員会の委員長に就任されたのであります．

1949(昭和24)年3月には，この示方書に無筋・道路・ダムをも加えたコンクリート標準示方書が制定されたが，その主旨を明らかにし，適用を誤らないようにするための解説が要望された．それで吉田先生を委員長とするコンクリート常置委員会が設けられ，1年余にわたり解説の審議を行ったのである．

当時の土木学会は惨憺たる状態であった．入居していたビルは壊滅し，工事中の国鉄ガード下(大手町付近）に事務所を開設したが，会員数は激減し学会誌は昭和23年に4冊が発行されただけであり，論文集は出版不能となったので，著者負担論文集の制度を発足させ，最小限の出版が可能となった程であった．

土木学会のこの窮状を打破するとともに沈滞したコンクリート界を振興するために，吉田先生は立ち上がられたのであった．委員長以下29名の委員が事務所に参集し，4部門** の幹事が提案した原案について詳細な検討を重ね，最後には合宿して深夜まで審議を行い，標準示方書解説が出来上がったのである．

この委員会は独自の風格を備えたものであった．吉田先生は，不備な原案は容赦なく叱責して訂正されたが，重要な項目では，最新の学理について諄々と説明された．それで先生と各委員との間には美しい信頼感が醸成され，幕末の“松下村塾”を思わせる程の，格調高い教育も行われたのであった．

出版した解説は，全国のコンクリート関係者および学徒に対する絶好の指導書となり，年度内の売却数は2万部に達し，土木学会の財政好転の端緒となったのである．

更に特筆すべきは，委員会はすべて奉仕であり，委員長以下，謝礼は全く受けなかった事である．この種の尊い伝統が，今後も継承される事を切望いたします（**第4, 5編** 参照）．

* 20章95条より成るものであった．
** 無筋・鉄筋・道路・ダムの4部門である．

（名誉会員　工博　元吉田賞選考委員会委員長）

5. 学術用語の制定作業

久保慶三郎



土木学会で使用されている用語を分析すると，汎用されているものもあれば，狭いグループで使用され，他のグループでは別の表現をしているものもある．用語が一義的になれば相互理解に便利ではあるが，慣行もあり，用語を完全に統一することは大変難しく，1954年に学術用語集が出版される以前にも，多くの先輩の努力で，英和工学辞典(1908年)，同改訂版（1936年）さらには新英和工学辞典（1941年）が学会の常置委員会の作業で丸善からつぎつぎと出版されている．

特に戦後には46年に「当用漢字表（1 850字)」と「現代かなづかい」が発表されたのを機会に，学術全般の用語の統一をはかる気運が高まり，従来の複雑，難解な学術用語を改訂するために，文部省は学術用語審議会を設置した．そのうち土木用語については，土木用語専門部会を置き，学術用語の標準化の作業を学会に委嘱した．学会は1948年に土木用語委員会（福田武雄委員長，久保幹事長）を設置し，関係学協会の委員を加えた組織で学術用語の制定作業を開始した．従来の事業と異なる点は，制定された用語は教科書，公文

書等に強制力を有する点，表現をやさしくするよう努力した点，他学術分野との調整により極力統一をはかった点および当用漢字の枠に強く縛られた点である．1954年に5 606語の「学術用語集土木工学編」を出版した．

1984年には学術のその後の進歩にともなう，用語の増補の必要性と，「常用漢字表」により，当用漢字の制限が解かれ，新しい漢字の使用が許されるようになったことから，科学研究費の助成を裏付けとして，文部省は土木用語の増補改訂を企画し，学会にその作業を委託した．学会では用語委員会（久保委員長，村井俊治幹事長）を設置し，1986年までの3年間の作業により，送り仮名の付け方の見直し，他分野との総合調整，不使用語の削除などにより，1万2 252語を標準用語に決めた．新漢字の使用も学術審議会に提案し，64字（うち20字は仮名書きで不明瞭な場合のみかっこ書きとする）を追加してもらって，1991年に「学術用語集土木工学編・増訂版」を完成させた（**第5編** 参照）．

（名誉会員　工博　東京大学名誉教授）

6. 私だけが知っている二つの話

成岡　昌夫



1．学会の年次学術講演会の第一号は，京大で1937.4開催され，戦後は1949年に始まった．総会プラス年次学術講演会の形式で，第1日の午前は総会，あとの1.5日が講演発表にあてられた．この形式がしばらく続いたが，発表件数が多くなったので，5月総会，10月に学術講演会の開催を筆者が提案して，1968年から実施されている．しかし，発表件数が3 000件をこえると，3日間では無理となる．したがって，日本機械学会のように，春は総会プラス講演会を東京で，秋は東京以外で講演会のみを提案したい．他の学会のやり方を調べて改善してはどうか．

2．学会の開催する講習会資料には，出版物に会長，支部長の“まえがき”あるいは“序文”がある．ところが，1953.3.阪大で開催された「水工学に関する講習会」のテキストの表紙に，「水工学の最近の進歩―水工学講習会講演集―」，「土木学会」とあるが，会長稲浦鹿蔵氏のまえがきはない．また，末尾の発行者に続く印刷所，印刷者は大阪市福島区の日本印刷出版(株)，社長　小林積造とあり，東京で印刷していない．しかし，会誌の1953.1号には「関西支部が大阪で開催する」の会告があり，奇怪千万と言えよう．この行事は石原藤次郎氏（京大教授）の発案によるもので，講師16名（2名を除いて故人）のうち，本間仁氏（東大教授）を除いては，全員が関西在住者である．筆者は当時，関西支部の商議員として編集校正を担当し，また，最後には印刷所で徹夜した思い出がある．筆者の記憶によれば，関西支部の企画した行事ではあったが，本部が1952年度に実施した事業があまりにもさびしく，「本部の行事として名義だけ貸してくれ」との申入れがあり石原教授が心よく（？）譲ったというのが真相で，したがって，会長のまえがきがない．こんな些細なことに気がつく方はまずはいないであろうが，苦労して報われなかった者として，裏話を書いた次第である．

（名誉会員　工博　名古屋大学名誉教授）

7. 耐震工学委員会発足のころ

岡本　舜三



1940年代は地震活動の活発な時代であった．46年には南海地震，48年には福井地震があり，多数の人命が失われた．また被害も大きく，特に前者では港湾が，後者では橋梁がひどくやられた．これに刺激されて耐震研究の気運が高まり，体験した震害を対象に研究が始められた．研究者層は非常に薄かったが東大震研の教授方の指導を得つつ，各研究所持ち回りの座談会を頻繁に開くなどして，情報交換，相互理解に積極的に努力した．

そのころアメリカでは地震応答理論の成立，電算機ENIACの完成，強震観測の成功など地震工

学進歩の基礎が整い，まさに将来の飛躍的発展が刮目される状況にあった．そしてHousner博士らは，それまで相互の情報交換皆無であった世界各地の地震多発地域の研究者が一堂に会し，各地の研究情報を披露し，世界的な地震工学研究の態勢を話し合うために，世界地震工学会議の開催を提唱した．時は桑港大地震50周年を記念して1956年，場所はバークレーである．

この招請をうけて我が国でも内藤，武藤両博士を中心に準備委員会が設けられたが，土木出身は筆者一人で他の大部分は建築出身者であった．この状勢の中で土木の事情に理解を得るには筆者個人の力ではどうにもならないと考え，発言に力を持たせるために土木学会に耐震工学委員会を作っていただいた．

委員会は沼田政矩博士を長に仰ぎ，55年11月に設立され，東　　寿，岡本舜三，神谷貞吉，小西一郎，近藤利八，田原保二，寺島重雄，友永和夫，畠山　正，平井　敦，星埜　和，松尾春雄，村　幸雄，最上武雄の諸氏が委員となり，幹事は新進の久保慶三郎氏が勤めた．この会の当面の仕事はバークレー会議の準備であった．当時は外貨不足のため外国渡航の許可を得るのは容易でなく，ようやく天埜，平井，岡本（以上土木），武藤，久田，南，棚橋，大築，中川（以上建築），河角，金井（以上地震）の11名が会議に参加できた．提出された論文はほとんが建築で，土木の論文は日本とイタリアのみであった．しかしそれが土木にも耐震問題のあることを各国に理解させるに役立ったかも知れない．

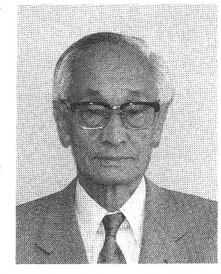
会議は大成功であり，ぜひ継続したいとの声が高く，お荷物を背負って帰ってはいけないと言われて国を出たにもかかわらず，次回（1960年）の日本開催を引き受けて帰ってきた．それで帰国するやすぐに耐震工学委員会は次期大会の準備に追われたが，おかげでこの大会も成功して，現在まで続いているWCEEの基礎がかためられた．

耐震工学委員会はこうして再度の国際会議の準備に追われたけれども，それが目的であってはならない．耐震工学研究の推進こそが目的であると最初から考えていたので，設立後2年目にとにかく第1回の研究発表会を57年9月10日，11日両日開催し，地震学者による特別講演を含めて19編の研究が発表された．研究発表会こそがこの委員会の使命だと信じ，1回も欠けることなく毎年1回現在まで続いている．永続性を自覚するために，講演概要の表紙の体裁を変えないようにしようと私は強く主張した．第1回の概要は54頁，昨年度の概要は866頁であるが，表紙には全く同じ体裁で“地震工学研究発表会”と書かれている．将来何百という講演概要が同じ体裁で本棚に並ぶ姿は，想像するだに楽しいことである（**第5, 7編** 参照）．

（名誉会員　工博　日本学士院会員　東京大学および埼玉大学名誉教授）

8. 日本学術会議と土木学会

伊藤　冨雄



日本学術会議では1949（昭和24）年1月に発足以来，同85年7月終了の第12期まで，会員の選出は，立候補・選挙制によって行われて来た．会員の定員は各部30名，第5部（工学）では，全国区が9専門に各1名，専門にかかわらない定員が14名で，それに地方区7名となっていた．

しかし，土木工学の専門では，土木学会が中心となって立派な候補者を推薦し，有権者の強力な支援も得られたので，多数の会員を送り込むことができた．すなわち，第1～12期の会員数が，順に5，7，4，2，3，3，2，3，4，3，6，4名の多数に上り，第13期以降は，学術会議の改革に伴い推薦制が導入されて土木工学の定員は4名に固定され，やはり土木学会主導のもとに，この4名と地方区関係若干名の候補者が推薦されている．

こうして選ばれた会員各位は，それぞれ目覚ましい活躍をされ，今日までに，副会長の八十島義之助先生，4期12年間も役員をされた石原藤次郎先生を含め，延べ人数にして副会長1，第5部の部長4，副部長3，幹事4名の役員を輩出している．これは，土木の会員の良識と行政的手腕が

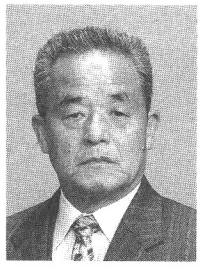
評価されたためであり，第7期ごろから左傾化を強めていた学術会議において，第5部とくに土木の会員の存在は貴重なものであった．

次に，学術会議の中の土木工学については，まず，昭和41年に始まる第7期から，水，都市・地域・国土，環境，災害などが重要課題として，特別委員会のテーマになっていた．また，土木関連の研究連絡委員会は，力学，水力学・水理学，構造工学，地震工学研連などのように，すべて他専門の人を含む横割りであって，研連本来の目的を達成しつつあり，他の専門ももって範とすべきであると思われる．

（名誉会員　工博　大阪大学および大阪工業大学名誉教授）

9. 4回にわたる土木工学ハンドブックとのおつき合い

宮崎　忍



各年度版とも，それぞれ思い出深いものが多々ありますが，主として製作・販売面での事柄について述べます．

29年（1954）版は米元先生には5か月にわたって午後から毎日来社され，校正をしていただきました．ダム編以外は計画案より約35％増頁となり，1万部印刷予定が7000部しか印刷できませんでした．また，当時は製版用フィルムがなくガラスの湿板のため，ピンホールの修正に多大の時間を要した上に持ち運びに非常な神経を使ったものでした．39年版（1964）は奥村・長浜両主査幹事が頁数の決定に苦労され，橋梁・鉄道編を削減することで他編の了解を得ましたが，結果は25％増でした．また，橋梁総論編の脱稿が大幅に遅れたために前後の編を印刷し，遅れを取り戻すという手段をとりました．この版から公務員試験の問題が出題されるということで，学生間で大いに利用され全冊で3万5000部を売り上げています．ちなみに29年版は2万3000部です．49年版（1974）は八十島委員長の編集方針による新体系を千秋幹事長のもと12名の幹事団のチームワークで当初の計画どおりに刊行されましたが，刊行後6か月以内で7000部を完売し通算で1万7000部を販売しています．平成元年版（1989）は，中村委員長，松尾幹事長以下21名の幹事団の熱意とご尽力で，従来にない視点と内容を盛り込んだ国際化・高度情報化社会に則した版として計画どおりに刊行されました．現在までに7000部が販売されております．

特に，49年版以後は編集会議の運営・集稿業務を幹事団と五老海課長を中心とした学会事務局に担当していただいたことが，企画どおりの出版となっています．

学会の総力を結集した学術的資産であるハンドブックの刊行に4回も関与させていただいたことは，編集者冥利に尽きるものと深く感謝しております（**第4，5編** 参照）．

（元技報堂出版（株）取締役編集本部長）

10. 会員のための学会誌

八十島義之助



土木学会創立80周年を迎え，学会誌も同じく年齢を重ねた．誠におめでたい．1962年から3年間会誌の編集委員長を仰せつかった（その前に単なる委員もつとめた）．30年たっているが，つい昨日のような気もするし，はるかかなたの出来事だったようでもある．

昨日のことに思えたのは，当時，わたしとしては夢中で取り組んだ印象が深かったからだろう．代々優れた編集委員長以下のスタッフが会誌の刊行に心をくだいておられたが，そのころがどんな時期かというと，論文集と会誌の編集二本立てになってから日が浅かった時期である．

したがって，会誌の編集もとかく受け身で，届いた原稿を取捨して登載を決めれば事終わりとの感があった．どうもこれでは会員諸氏に喜んでいただけないとして，委員の諸氏と相計って，なんとか，意図をもった編集にもってゆこうと，工夫，苦心を重ねることになっていた．

そして欄もいろいろ増やしていったと覚えてい

る．冗談だが，まずすべての会員が，届いた学会誌の封を切ってくれるように，次の段階は，頁をめくってくれるように，そして熟読してくれるように，そんな学会誌にしよう，などと話し合っている．少し大げさにいえば，そんなことが話題になる状況だったのである．

はるか彼方の編集委員長だったなと感じるのは，最近届く学会誌を見た上である．特集されるようになった，活字は大きくなった，写真も色刷りになった，つまり商業誌より先に封をきり，頁をめくりたくなる学会誌が届くのである．

ここに来るまでに，歴代の編集委員長以下諸氏が，さぞかし工夫を重ねられたに違いないことと思うと，わたしが関与し，しかも議論したことなど随分古い話だったなと思うのである．

そのような時間の経過に思いを至すのだが，委員長時代に忘れられない事件が起こった．夕闇に包まれようとするころ，学会事務局の会議室で編集委員会を開催していたら，突如として天井からコードでぶらさがるテーブル真上の電灯が大きくしかも左程あわただしくなくゆれ出し，床もゆれて来た．なんとなく遠方での大地震を想像し，委員は顔を見合わせたが，審議は続行した．

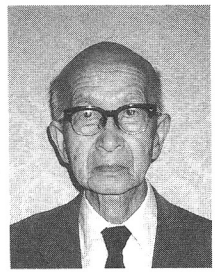
1964年6月16日で，それがあの大きな被害をもたらした新潟大地震の日だったのである（**第4，5編** 参照）．

（名誉会員　工博　帝京技術科学大学長，第24代会誌編集委員長）

11．土木図書館のはじまり

米元　卓介

1964年の学会創立50周年記念事業として土木図書館が設立されることになった．ついては中身の図書等の収集，整理，運営のための運営委員会を作るからそれを担当せよと言われた．私は図書館については何も知らないから困った．学会の建物が建っている土地は公園緑地内なので，学会だから建てられたので，それに隣接して図書館が建てられるようになり，しかもそれが公共図書館としての認可が得られたのは理事者のお働きによるものである．図書館の建物は64年11月24日の学会創立50周年記念日に開館式が挙行された．64年1月，博識の千秋信一氏と私の同僚の堀井健一郎氏に来ていただいて運営委の設立と作業の進め方について相談し委員や幹事の候補を定め，2月中ごろに第1回運営委を開いて仕事を始めた．



まず今までに学会が持っている書籍や資料を見ると，先輩がかなりの量を集めておいて下さったことを知った．それらを組織的に分類整理して，それを基にして今後の収集，運営を始めることとした．

各分野にわたって収集するものは，内外単行本，内外雑誌，国際会議論文集，辞典類，さらに各種資料であり，これらを整理するための分類法を定めた．

特にここにいう各種資料とは，大学，研究所，官公庁，各種企業体の非公刊資料，工事誌，設計図等，本屋で買えるものでなく，貴重ではあるが個人では入手しにくく，かつ暫くすると散逸しがちなものなので，本図書館でこそ収集保管したいものと思った．さらに閲覧方法，コピー等のサービスの規程も検討した．

さて開館以来年月を重ね蔵書も数を増し，1985年には土木図書館目録，1992年にはその追補版が刊行され，1993年には所蔵雑誌目録も刊行された．慾をいえばこのコンピュータ時代であるから，これらの目録のデータベース化が期待されていたが，最近その実現が発表され，まさに快哉を叫びたい思いである．

最後に初期の委員会の委員，幹事の諸氏に感謝するとともに，特に諸般の構想とその推進に格段の努力をして下さった千秋幹事長に感謝して，当時の回想としたい（**第4，5編** 参照）．

（名誉会員　早稲田大学名誉教授）

12. 日本土木史の編集に参画して

高 橋　　裕



青木楠男先生が，東大の私の研究室に，学会の日本土木史（大正元年～昭和15年）編集のご依頼にお見えになったのは，1963（昭和38）年のはじめであった．伺えば，原稿の大半が約10年間眠っているという．一部の執筆者の原稿が未着で，全体の統一もよくとれていないとのことであった．当時，助教授であった私にとって，青木先生は遙か雲の上の存在であった．以来約1年半，6 000枚の原稿，900を越す図表の整理と取り組み，どうやら1965（昭和40）年12月出版に漕ぎつけた．その間，学会の岡本義喬さんをはじめ，石塚健，五老海正和さんの全面的協力を得て泊り込みの仕事が続いた．

土木学会は，1936（昭和11）年に不朽の大著『明治以前日本土木史』の出版以来，史書編纂に並々ならぬ業績を挙げている．1940（昭和15）年でそれを止めるべきではないと考え，青木委員長にお願いし，引き続き，昭和16年～40年の日本土木史編集委員会を設けて頂き，私はその総括幹事として，そのお手伝いをすることとなった．この日本土木史は1973(昭和48)年4月に出版された．原稿7 600枚，図表1 150に達し定価も3万6 000円となった．今回は年表の充実も含め幹事に島崎武雄さんが加わったし，最初の企画段階からの編集であったので，前者よりははるかに円滑に事が運んだ．全体の構成を定める委員会で各編主査の方々が，割当枚数の増加を力説されたことが印象に残っている．高度成長期における土木技術の発展と事業の飛躍的発展の成果を後世に詳しく伝えようとする熱意の迸りでもあったろうか．ようやく昭和40年までの日本土木史編纂が終了した段階で，学会として土木史への輝かしい伝統を今日に活かすために，土木史に関する委員会の設立を青木委員長とはかり，理事会にその趣旨を説明にあがった．当時，理事会の過半の空気は必ずしも積極的支持とはいえなかったと私は理解したが，少数の理事が熱心に同調して下さり，1974（昭和49）年1月，日本土木史研究委員会が目出たく誕生した．

なお，この時機に古本街にて10万円以上にもなって入手困難であった『明治以前日本土木史』の復刻を学会で検討し，岡本さんが版元の岩波書店に持ちかけたところ，書店自らが同48年12月に第3刷として定価2万円で出版した．さらに第4刷が1994年1月に定価4万6 000円で出版されている（**第4，5編** 参照）．

（正会員　工博　芝浦工業大学教授）

13. 土木計画学って何？

米谷　榮二



京都大学土木工学科では，1959年に土木計画学，土木設計学，土木施工学の3科目を設けた．これらは土木工学の専門基礎と専門応用の間をつなぐ三本の柱となるもので，広い視野に立って土木工学の全ぼうを見渡すよりどころになると考えた．この土木計画学の教科は，他の大学に類を見ない先駆的なものであったが，4，5年のうちに他大学でもこれに関心を示される向きがでてきた．しかし，その学問体系の認識は必ずしも同じではなかった．これらの諸先生から教育をうけた学生が社会に出て，方向性の異なった土木計画学が論じられるようになると，新しい学問体系が曖昧になる心配があったので，それが乱れないうちに，土木学会に研究委員会を設置していただいて，専門の研究者が毎月集まって，学問の方向性だけは正すことにしたいと思った．

私は1966年には理事を拝命して毎月の理事会に出ていたので，この研究委員会の必要を説いて新設をお願いしたが，年配の理事たちには理解していただけなくて，「都市計画なんて大正時代からやって来ている」と言われた方もいた．私の説明力が不足で誰にも理解してもらえず，次回理事会まで保留となった．一度否決されたようにつた

えられているが，否決ではなく保留であったことを明らかにしておきたい．一事不再議の原則があるから否決ならば次回に蒸し返したりはしない．次の理事会の前に，鈴木雅次先輩が大いに理解を示され，「もし委員会ができたら自分が委員長になってもよい」と言われたことが聞こえて来たので，理事会では同じ説明をくり返すことはやめにして，鈴木先輩の一言を紹介したら，物のわからぬ理事さんが「鈴木先生がそう言われるのなら，やはり新しい学問なんだろう」と態度豹変して可決になったことが忘れられない（**第5編** 参照）．

（名誉会員　工博　(社)システム科学研究所名誉会長）

14. 学会誌の委員長として

増岡　康治



1966（昭和41）年6月からまる2年間の編集委員長時代は，私自身，建設省の技術行政官として脂が乗った時期であった．学と産の中庸としての官を意識してお引受けしたが，異例の人事だったかも知れない．

当時すでに論文集が本誌から切り離されて発刊されており，学会誌の編集方針には自由度があった．そこで高橋裕先生を幹事長とする若き論客数名を委員兼幹事として産官学の中からお手伝いをしていただくことにした．編集委員会に幹事団から提案をして，議論の活発化を意図したものであった．

時あたかも東京オリンピック後であり，土木技術者は「より大きく，より長く，より深く」に向って，あくなき挑戦をするポテンシャルを有していた．片や公害問題，東大紛争に象徴されるような社会のひずみが露呈しはじめた時期でもあった．

社会資本の中枢としての土木的施設の国民生活に与えるインパクトは従来以上に強烈であり，しかも国民の要請も大きく，民間の技術力の飛躍的向上を背景に，「土木工学とは何ぞや」の課題は，学会誌の編集方針に当然のごとく浮上した．

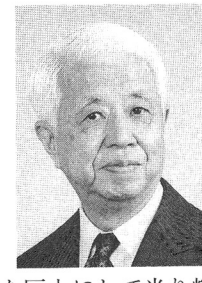
会誌の表紙の公募，テーマ設定による懸賞論文募集，あるいは郷土からみた遺産としての土木シリーズ，そして先輩から引き継いだ土木年鑑の促進などは，親しみ易い学会誌を意図したものであった．時の話題は特集号で総覧することとしたが，特に「総合と分化」の課題は力が入った．土木工学が内蔵する社会工学性，総合技術性，そして科学性が人間の英知と努力によって計画化され，技術化されて社会開発，保全に結実してゆく再認識の中で，コンセプト形成ができないものかと模索することそのものが，この時代を反映するものであった．このことは大学，高校の土木教育の在り方まで論及する破目になったが，幸い学会の方でプロジェクトチームが編成され，一応の結論を得る所までたどりついた．

今日の学会誌は楽しい．学会の編集事務局の評価も高いし，その後の編集委員もオピニオン・リーダーとしての役目も果たされて感謝をしている今日である．

（正会員　参議院議員　第26代会誌編集委員長）

15. 土木学会と私

芦原　義信



本年11月に土木学会が，創立80周年を迎えられるとのこと，心よりお喜び申し上げる次第である．なんといっても土木の分野は，河川や道路のような国の基幹となる行政の分野や，ダムやレインボー・ブリッジの建設のような巨大にして光り輝く建設技術の分野を支えておられるだけに，社会に対する責任はきわめて重い．その点，我々建築の分野も社会に対する責任は軽いとは思わないが，一方，個人的な才能や創造性もかなり評価の対象となることも事実である．そんなことからか土木の分野は組織としての行政に強いのに対し，建築の分野は比較的個人的才能を背景とした民間の分野に強いということがいえるであろう．

今から8年前の4月には，日本建築学会が百周年を迎え，盛大に祝賀会を催すことを企画し，建築界としては開闢以来の会員の協力を得て，なん

とか実施することができた．明治19年，青木周蔵・初代会長以来，33代目の会長を私が務めたのである．建築界はどちらかというと個人的で，普段はあまり団結心が少ないが，この時はそれなりにまとまったと言えよう．

それに対し，土木学会は会員全体の団結が素晴らしく，皆で協力しながら前進しているように思える点がうらやましい．しかしながら，このところの建設界問題が技術をこえて，一方的に社会に報道されていることは心配である．不確定要素をもった大自然を基盤にして，わが国の優れた建設技術を駆使する建設界には，当然ながら人間間の相互信頼や義務も必要なのである．そんな時，我々一人一人が確固たる信念をもって技術をこえた国土や歴史文化のために更に前進すべき時が来ているようにも思える．そんな時に土木学会は80周年を迎えられるわけであるが，更に新しい進路を見出されることを心より祈って止まない次第である．

（工博　建築家，東京大学名誉教授）

16. 土木史の展開に期待

村松貞次郎



土木学会は本年11月に創立80周年を迎えられる．おめでとう，と申し上げながらいささか気恥しい気持ちが心の底にある．それは脱け駆けの気恥しさである．私の属する日本建築学会は，すでに1986（昭和61）年に創立100周年を盛大に祝った．造家学会と称して1886（明治19）年に設立されたからである．ところが，すでに1879（明治12）年に，その年11月に工部大学校を卒業した第1回卒業生19名を核にして工学会（のちに日本工学会）が設立されていた．ささやかながらも連合工学会で，その当初の規約に，それぞれ専門の学会をつくるのは止めよう，という，趣旨の一文があったと記憶している．いわば分派行動の禁である．

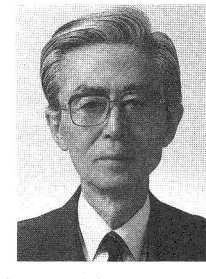
しかし，これは無理な約束だったことはその後の日本の工学の歴史が実証している．造家学会も御多分にもれず脱け駆けしてしまった．ところが工学会の中心になっていた土木の人たちは，実直にこの“本家”の孤塁を守って1914（大正3）年までがんばっておられたのである．がんらい近代工学の母胎はシビルとメカニカル．イギリス土木学会と機械学会（前者は1818年，後者は1847年）の創立がそれを物語っている．私の気恥しさは，もちろん個人のことだが，こんなところによっているのである．

ところで，『明治以前日本土木史』という偉大な遺産を擁する土木学会で，20年ほど前からとくに明治以後の近代土木史の研究がさかんになってきたことは，建築史を専攻する私としても同慶にたえぬところである．その具体的な成果の一つに昨年春から始まった「近代文化遺産」の重要文化財（建造物に含まれる）指定であろう．新谷洋二先生が，われわれ第二専門調査会の委員に加わって下さったのは心強い．この分野でも保存と活用という建築史学が当面しているフィールド・ワークがクローズ・アップされてくると思う．ますます連係を深めて行きたいと期待し，かつ，お願いする次第である．

（工博　法政大学教授，東京大学名誉教授）

17. IAHR（国際水理学会）の会長をつとめて

林　泰造



私が思いがけなく役員指命委員会から次期会長にとの交渉を受けたのは，1971年9月パリで開催された第14回IAHR Congressのときであった．私はそれまでの4年間同学会の副会長の一人であり会長の任がいかに大変であるかを十分承知していたので自分にはとうてい無理であると思い辞退したが，指名委員長Elder氏（米）から，IAHRの会長はこれまでヨーロッパとアメリカ合衆国の間だけの交代で選ばれてきたがこれは良くない．今回からそれを改めようというのだから考え直して欲

しいと強く説得されて遂に受ける決心をした．今から考えてみると，IAHR の中における日本の水理学研究に対する関心の度合は 1960 年代において飛躍的に増大したように思われる．Congress の場における日本の活発な活動，学会運営面での安芸皎一教授，本間仁教授の理事，副会長としての適確なご貢献，また，1962 年仙台で開催された IAHR のキャビテーション等のシンポジウム（組織委員長・沼知福三郎教授），そして 1969 年京都において開催された第 13 回 IAHR Congress（組織委員長・石原藤次郎教授）の非常な成功が日本の水理学・水力学研究の水準の高さと研究者層の厚さを広く世界に紹介することとなり，それからの日本のこの分野の研究の世界の中で占める役割に大きな影響を及ぼすことになっていたのである．

1972 年から私が会長となり，1974 年に再選され通算 2 期 4 年間その任に当たった．IAHR の事務局はオランダのデルフトに在り，当時はまだファクスなどのない時代だったので，事務局長 Schoemaker 教授とは，いつも長文の手紙で頻繁にやり取りをした．私が会長として最初に取り組まねばならなかった大きな課題は，時代の要請とともに絶えず変化する水理学研究の内容と体質の自己検討とその方向づけ，および他の水関系国際諸学会との協調であった．会議では討論が長びくと動議が提出されることがあり，会長として裁決にもって行き方も初めはわからず面喰らったが，次第にそのような会議の進め方にも慣れ，理事各位の大きな支えもいただいて支障なく務めを果たしてゆくことができた．IAHR の公用語は英仏 2 か国語であるため私がフランス語を知っていることは会長として何かと都合がよかった．この 4 年間は私にとって絶えず重荷であったが得たものも大きかった．公式の場での言葉の使い方，会議の進め方，挨拶の仕方から色々な場合のマナーのことなどにいたるまで，大きな勉強ができたことを非常に有難いことであったと思っている（**第 7 編 2.5** 参照）．

（名誉会員　工博　Dr.Honoris Cauza 中央大学名誉教授，(株)アイ・エヌ・エー特別顧問）

18. 昭和 48 年度全国大会の裏話

堂垣内尚弘



土木学会昭和 48 年度全国大会（1973）は，波乱に満ちた大会となった．大会 3 日前の 9 月 29 日，北大構内に“伊達火力発電所建設反対・尾崎晃教授弾劾”の立看板が立てられた．これは，港湾工学の尾崎教授が北海道電力に協力したとしての抗議であったが，恐らく伊達火発にゴーサインを出した知事堂垣内をもねらってのことだったろう．このような反対派学生の不穏な空気を察知した講演部長の山岡勲教授が，実行委員長の市瀬勲道開発局長と協議の上，特別講演の会場を北大クラーク会館から北海道自治会館に急きょ変更することにした．

10 月 1 日，講演会場の自治会館には，全国から 400 人以上の参加者が集まっていたが，会場の前列右側には，ヘルメットを隠すように抱えた過激派グループが十数人座っていた．私は知事として「北海道開発の現状と将来展望」について特別講演をすることになっていたため，私の身辺警護には特に気を遣ってくれたようだった．私の講演が始まると，こぶしを振り上げ，反対の気勢を揚げ始めたので，私は「話は聴くべきである」と強くたしなめた．すると，一時は静粛になったが，その後も二度，三度と騒いだため，「会議の妨害者を排除する賛否」を参加者に問うたところ，圧倒的な賛成を得た．そこで，司会者の本間四郎君（道土木部長）に妨害者の排除をお願いした．15 分くらいで排除は終わり，会場も平静になり，私の講演は予定どおり終わることができた．

10 月 3 日，尾崎晃教授の論文発表が予定されていた学術講演会場の北大工学部 C 15 教室にも，反対派学生が座り込んでいたようだが，発表は個人発表でなく，総括報告形式を採用したため，尾崎教授は欠席され，反対派学生は何もできず，研究発表は無事終了した．

以上，開催間際の特別講演会場の変更や反対派

グループの妨害などについては，公式な記録として何も残っていないため，当時，実行委員の一人であった加来照俊北大教授の協力を得て，関係者から事情を聞いて，大会の知られざる裏話としてまとめたものです．

（名誉会員　元北海道知事　学校法人東日本学園理事長）

19. 田中賞とのかかわり

大野美代子



縁あって土木の仕事を始めたのは，1976年のことである．当時，土木にもデザイナーの協力が必要と考えられ始め，首都高速道路5号線の関連街路に架かる蓮根歩道橋の設計に参加した．それまで通行機能を持つ土木構造物としか考えられていない歩道橋に，都市の新しい歩行空間のあり方を提案したのである．その切口も評価されたのか蓮根歩道橋は土木学会田中賞をいただいた．現在では，土木のデザインをシビック・デザインと呼んで設計分野に認知されつつあるが，当時の状況でのデザイナーの仕事は，土木の方々の目にものめずらしく，新鮮に写ったに違いない．続いて土木学会田中賞の賞牌そのもののデザインを依頼されたことは，うれしい驚きであった．

美しい橋に与えられる―この賞は毎年，数橋に与えられるが，この賞の目的を考えると，受賞する橋そのもの，あるいはその近辺に取り付けられることを前提としなければならない．そこで，現代の橋梁技術の粋をこらした様々な橋に調和しながら，橋と一緒に風雪や年月に耐えるデザインであること，シンプルでしかも賞にふさわしい品格や輝きを持つことを目標とした．取付箇所が不特定であるため，周辺に馴染みやすい円形を基本とする一方，橋は建築とは異なり，力強い構造物であるため，小型ながら立体感のある明快な形としている．また，より質を高めるために，文字についてはグラフィックデザイナーの小島良平氏，製作については青木秀憲氏の協力を仰いだ．

蓮根歩道橋の受賞をきっかけに，思いがけなく「橋のデザイナー」の道を歩んでしまったが，続いてデザインに協力した「かつしかハープ橋」「堀川筋高架橋」「ヨコハマベイブリッジ」が次々と田中賞を受け，ますますこの賞との絆の深さを思わざるを得ない．



日本の橋もめざましく変わりつつある．これからどのような斬新なデザインが生まれ，この賞が贈られるのか楽しみである（**第4編 2.2** 参照）．

（有・エムアンドエムデザイン事務所代表）

20. 新潟会のこと

大熊　孝



土木学会新潟会は，1979（昭和54）年5月23日に，「新潟地区における会員相互の親睦交流を通じ，土木学会および土木事業の発展に寄与するとともに土木学会の活動に貢献すること」を目的に設立された．

当時，新潟地区では，上越新幹線，北陸・関越自動車道を中心とした多数のビックプロジェクトが進行中であり，多くの土木技術者が新潟に集まるようになっていた．しかし，新潟県下の土木学会会員は関東支部に所属することになっており，学会への帰属意識は希薄で，土木技術者間の相互の交流は大変乏しいものであった．そうした状況下において，当時新潟県土木部長であった吉武公夫氏や建設省北陸地建の土屋雷蔵氏が中心となり（いずれもすでに故人），産・官・学の土木技術者を糾合し，新潟会を発足させたのであった．

当初の新潟会の活動は，講演会，見学会，親睦会を中心に行われていたが，昭和56年豪雪に見舞われ，38豪雪と比較して社会経済状況と雪害対策の変ぼうは目を見張るものがあり，これを記録する『56豪雪の記録』（1981年12月）が編集・発行されるに至った（後に『59豪雪の記録』も

発行)．さらに，地域に根ざした土木技術の発展のためには地域における研究・技術の交流が必要との認識のもとに，1983年11月，第1回新潟会研究調査発表会が開催され，以後，大幅な発表件数の増加を伴いながら現在まで継続開催されている．

その後，上越新幹線が上野駅に乗り入れた1985年3月，第12回土木学会関東支部技術研究発表会が，初めて東京を離れ，新潟大学で開催された．また，1990年10月，第45回土木学会全国大会がこれも初めて人口50万人弱という地方都市新潟で開催された．いずれも新潟会が中心となって運営されたものであり，新潟会の活動が土木学会の活性化に少しは貢献したものと考えている（**第6編 1.11** 参照)．

(正会員　工博　新潟会幹事　新潟大学工学部教授，'80年史編集委員)

21．女性の職業としての土木

寺本　和子



20年ほども前のこと，私が「砂防の仕事をしています」と自己紹介した時，ある人の反応は「怖いですねえ」というものだった．

確かにそのころ，砂防も含め土木関係の技術者としての女性は，ほとんど変人奇人と思われるほど少なく，怖いという感想も自然だったのかも知れない．

ところが約10年前，そのころすでに女性の土木技術者が目立ち始めていたが，土木学会誌で女性土木技術者による座談会が企画され，その席上，女性土木技術者の会を作ることが提案された．

驚いたことに，すぐさま28人の女性から「待ってました」といったような返事があり，昭和58年に『土木技術者女性の会』として正式に発足した．最初の総会で私は新会員たちの仕事への情熱と，家庭との両立への努力などに圧倒される思いがした．

女性技術者たちの土木への思い入れは，「作ることがすき」「スケールが大きい」など，相当なものがある．会員数も最近は170人を越え，会員でない女性土木技術者もかなりの数に上るだろう事を考えれば，女性の間での土木の人気は上々と言える．

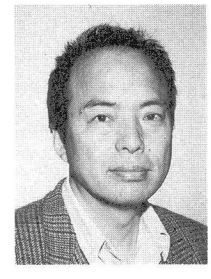
経営者や上司の方々の中にも，女性のやる気を上手に引き出したり，生かしたりして下さる方々が増え，女性の大きな力となって下さっており，感謝している．

土木に限らず，女性が生きがいを持って一生の仕事を選び，男女が共に社会に参加し，家庭の責任をも分かち合う，男女共生の社会こそが理想であると思っている．そのためには，男女の役割への固定観念を捨て，社会の福祉体制を充実するとともに，ますます女性の職業意識が高まることが重要なのではないだろうか．

(住宅都市整備公団関連施設交通部調査役，前土木技術者女性の会会長)

22．四谷見附橋の価値の発見

伊東　孝



1974年，四谷見附橋の架け替えが決まった．地元からは「景観的にすぐれているので，橋は保存してほしい」との要望が出された．東京都は景観調査をコンサルに委託した．

78年の初夏，アルゴ都市設計につとめていた友人の伊藤英樹君から，四谷見附橋の景観調査を頼まれた．ちょうどこの年わたしは，6年がかりの学位論文が通り，気持ちが一段落していたときであった．

調査を進める中で橋の袂にあった千代田区の説明文に着目した．「橋は，赤坂離宮（現・迎賓館）の面前に当たるところから，景観を損なわぬよう設計された」．そこで委員会の席上，「橋が上路式のアーチ橋を採用したのは，赤坂離宮との調和や展望を考慮してデザインしたのではないか」と問題提起したが，最終報告書では否決された．だが，もう少し調べてみようと決意した．

新谷洋二先生が土木史研究委員会の幹事長になられ，翌81年から土木史研究発表会を開催する

ことにした．ついては応募原稿がどのくらい集まるのか分からないので，幹事は原稿を提出するよう義務づけられた．幹事でもあったわたしは，これを機会に，四谷見附橋と赤坂離宮との装飾の類似性に焦点をあてた論文をまとめた．橋の高欄デザインは赤坂離宮の柵のデザインをモチーフにし橋と離宮との関連性を神社の配置計画になぞらえたものである（拙著『東京の橋』鹿島出版会）．

学会のすぐそばにある橋のエピソードを紹介する形になったのも幸いし，当時の土木学会長であった八十島義之助東京大学名誉教授もコメントを寄せられ朝日新聞に掲載された．業界紙の日刊建設工業新聞も関心を示し，紙面の一頁をさいて写真をそえてわたしの論文を紹介してくれた．

学会事務局は，四谷見附橋の土木史検討の有無を東京都に問い合わせ，これが委託調査を受けるきっかけになり，その後の土木史研究委員会の委託研究の先駆けになった．この調査結果が，橋の高欄回りの復元と橋詰用地の新たな設置に結びつく（詳しくは『四谷見附橋物語』技報堂）．

しかし橋と赤坂離宮とのデザイン的な対応性について，あまり意義を感じていない委員もいた．最初の2年間の調査を終えた懇親会の席上，次のようにたずねられた．「伊東先生，四谷見附橋は本当に価値があるのですか？」．アメニティ行政や景観行政がはじまるのは，しばらく後のことである．

アーチ橋本体の移築については，また新たに関係者の努力が必要であった（**第5編** 参照）．

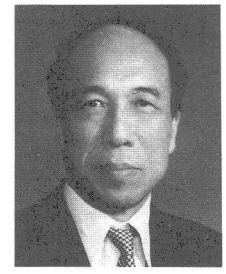
（正会員　工博　日本大学教授，80年史編集委員）

23. 喜と苦の委員会執行

千秋　信一

私が大学院特研生のとき，恩師本間仁先生のご指示で，当時東京駅近くのガード下にあった土木学会事務局へ出向いたのが，学会との最初の出会いである．その日から数えれば，学会の歴史80年のおよそ半分を，それ以後今日まで学会とお付き合いさせていただいたことになる．

学会の委員会に参加した最初は，文献調査委員会で，その後順次各種の委員会に参画したが，委員長としては，文献調査委を皮切りに，行事企画，会誌編集，水理，原子力土木，新体系土木工学編集と携わらせていただき，最も新しくは，平成5年に設立された地球環境委員会の初代委員長を拝命した．



国連「環境と開発」会議において，地球環境の保全と開発の調和に向けて，「持続可能な開発」を目指す世界183か国の合意が成立し，わが国においても「環境基本法」が制定されるというこの時において，「土木学会地球環境行動計画」の制定をはじめ，最も焦眉の課題を担当する委員会を執行する機会を与えられたことは，私の学会活動の中で最上の喜びとするところとなった．

その一方，それ以上に忘れ得ぬ苦しい思いを強いられたのは，新体系土木工学編集委員会の作業であった．

この委員会は1977（昭和52）年にスタートし，全105巻の編集出版を担当したが，当初は月2.5巻の刊行ペースで推移したものの，初巻が出てから5年目に79巻目を刊行して以降，残り26巻の刊行に難産また難産，1994年6月，全巻の完成を見るまでに17年の歳月を要した．

当初，この出版計画が発表された当座，「50巻も出れば上出来」という声も聞かれたから，計画通り完成したことは本望と言わなければなるまい．最後の数年は，生みの苦しみから委員長ひとり切歯扼腕の毎日であったものの，編集作業を共にした60名を超える編集委員・幹事や日本全国にわたり300余名に及ぶ執筆者の方々との交流は，私の学会活動における貴重な資産となったのである．

それにつけても，土木学会との最初の縁結びをして下さった恩師本間仁先生のあの時の深いお心配りは，感謝の念と共に生涯忘れることができない（**第4, 5編** 参照）．

（正会員　工博　電力中央研究所特別顧問）

24. 論文集改革の思いで

小林　一輔



筆者が論文集編集委員会の委員長に就任した1982（昭和57）年当時，「論文集」はその存続すら危ぶまれるような状況にあった．投稿論文の激増に伴い，論文集の年間総頁数は10年間で2倍に達した．これに伴って財政負担の激増，委員会組織のマンモス化，投稿決定から掲載までの期間の長期化などの問題が顕在化した．理事会では，「重箱の隅をつつくような論文が多い．一体，土木学会で論文集などというものが必要なのか？」という暴論が飛び出し，一方，登載までに余りに長期を要することに対して，しびれを切らした投稿者の中には他の学会誌へ乗り換える動きも出てきた．また，編集委員は多数の投稿論文の査読に追われ，委員会審議も夜遅くまで継続するのが常となった．たまたま，前委員会（吉川和広委員長）当時に発足した「定期刊行物に関する検討委員会」（伊藤 学委員長）が問題解決策の一つとして“論文集の分冊化”を答申した時期であったので，編集委員会としては早速これを実施する方針を決定し，その実現のために必要な検討を開始した．各部門当たり年2回の発行とした場合に予測される頁数，各部門当たりの購読者数の予測，発行に要する費用の見積り，月刊から年2回発行への移行に伴う委員会運営方法の変更など，検討を要する事項は山積していたが，当時の森地茂幹事長，これを引き継いだ三木千寿幹事長を中心とする編集委員のご努力によって，なんとか乗り切ることができた．財政上の赤字も，論文集発行の費用を全会員が負担する方針を打ち出し，それを可能にする方策として第Ⅵ部門が創設された．全会員に論文集を購読して貰うためには，論文集の内容を論文のみでなく解説や委員会報告等を含む魅力あるものにする必要があり，このために委員会の業務を重点を「査読」から「編集」に移行させることにした．査読は登録された「査読委員」にお願いし，編集委員は査読結果の判定のみを行う方式に改めたため編集に専念できることとなった．このために委員会の構成も委員長以下80数名から30数名にスリム化され，また，委員会の開催回数も半減した．経費の節約とともに委員の負担が大幅に緩和された．

新しい方式による編集委員長には会長・副会長クラスの大物という方針を打ち出し，意中の人であった丸安隆和先生にお願いしたところ快くお引き受けいただいた．1982年からの2年間は論文集編集委員会にとって疾風怒涛の期間であったが，丸安先生，編集委員ならびに学会事務局担当者の熱心なご協力を得て，なんとか改革を軌道に乗せることができた（**第4, 5編** 参照）．

（正会員　工博　千葉工業大学教授，第21代論文集編集委員会委員長）

25. 論文集第Ⅵ部門への歩み

上田　勝基



『おい，ちょっと集まってくれや』故・湯田坂さん（論文集第Ⅵ部門・初代小委員長）の良くとおる声が電話の向こうで呼び掛けたのは，1983年の秋の最中であった．

小委員会での私の古いメモによると，論文集に関する当時の概況が推察できる．すなわち，1970年ころには論文数の増加もあって学会の財政負担が増加し，70年代後半になると，学会・投稿者・読者のいずれの側からも多くの問題が指摘されていたようである．1980年には，深刻な事態を回避するために増頁策等を実施する一方，1982年夏ころより抜本的な対策として論文集の分冊化の検討が開始されたようである．この結論として『論文集Ⅰ～Ⅴ部門の分冊化と希望者へ有料で配布する』『実務者向きの施工技術を中心とする論文集第Ⅵ部門を新設し，当分の間，学会誌と共に配布する』『各部門とも当面年2回発行する』等の合意が得られたと記録されている．

湯田坂さんは私たちを集めるに先立って，小林

一輔先生（当時・分冊化前の論文集編集委員会委員長）や丸安隆和先生（当時・分冊化後の論文集編集委員会委員長）などとの打ち合わせを通して第Ⅵ部門の基本像についてある程度のイメージをまとめ，『在来の論文集をそれぞれの分野の縦糸とすれば，新設の第Ⅵ部門は土木工学を中核とし他の工学分野も含めた横糸的性格を期待した』に違いない．

呼び掛けのあった第一回目の会合から『土木技術を重点的に取り扱って，第一線で活躍する技術者に役立つ情報伝達のための論文集』とする基本路線に沿って，主要な読者層の設定とそのニーズ調査から開始した．

委員会の活動が軌道に乗り始めたころ，小委員長の急逝に合ったが，各委員のご努力のお陰で1984年9月に第一号を発刊することができた．以来10年を経過した．その間の多くの方々のご協力とご支援に感謝し，今後の一層の発展を切に希望する（**第4, 5編** 参照）．

（正会員　ハザマ興業(株)代表取締役社長
元論文集第Ⅵ部門第2代小委員長）

26. 日本工学会100周年の想い出

川越　達雄



日本工学会の創立100周年記念式典および祝賀会は，1979（昭和54）年11月20日，日本工業倶楽部にて，皇太子殿下，妃殿下（現天皇，皇后）の行啓を仰いで厳粛に挙行されました．私は実行委員会の総務小委員長として，式典の司会という大役をお引受けしましたが，両殿下の前でしたので式典が終わるまでたいへん緊張しました．警察より，安全には万全の注意を払うように言われていたので，不慮の事故もなく無事終了した時は，さすがにほっとした思いでした．

殿下，妃殿下よりこの機会に，工学について懇談の形式で色々話合いをしたいという有難いお申し出があり，日本工学会の役員の中から吉識会長はじめ7名が，2週間後の12月4日東宮御所にお招きうけ，私もその一員として列席する光栄に浴しました．式典の打合わせで何度か東宮御所へ参上しましたが，お居間の方まで伺行したのは初めてでした．お部屋からは，ガラス戸越しに美しいお庭がよく見えましたが，白樺が配置よく植えられており，人工を加えながら自然をそこなわずに，武蔵野の趣を残すといった極めて清楚なものでした．

ご懇談は終始なごやかに進められ，さすがに吉識会長はじめ工学の権威者ぞろいとあって，豊富な話題が次々と展開し，両殿下からも適時適切なご質問もあり，一時間余もアッという間に過ぎ極めて短く感じられました．

最後に，佐渡金山の採掘の絵巻（徳川時代のものの複製）を献上し，今泉副会長よりご説明申し上げたところ，両殿下がお顔を付き合わせるようにしてご覧になり，時々お二人でうなずき合うといった，いかにもお睦まじいお姿を拝し，ほほえましく感じました．

殿下自ら推稿を重ねられたという，格調の高い記念式典での「お言葉」（**256頁** 参照）といい，東宮御所でのご懇談といい，両殿下の工学に対するご理解の深さに接し，感激を新たにしたものでした（**第7編 1.4** 参照）．

（名誉会員　元土木学会専務理事，80年史編集委員）

27. 役員選考をめぐって

伊藤　学

学会運営の中枢を掌る役員の選考が会員の総意を反映したものであるかどうか，どの学会でも何がしかの問題があるに違いない．わが土木学会のように歴史の長い大学会ともなると，多少の手直しは可能としても，長年の慣行を大きく変えることは容易でないが，それを大多数の会員が全くあずかり知らないといった状況は，できるだけ改善することが必要と考える．

私が役員選考委員会の委員長をつとめたのはかなり前のことであるし，当時の経験については既に記憶が薄れてしまったが，理事については議論はなく，会長候補者が主たる対象であったという憶えがある．しばらく前から会長は大学，民間，



運輸系，大学，建設省系なるサイクルとなっている．私どものときは，運輸系がそれまでどうしても当時の国鉄系に偏していたのを手直ししようというのが最も大きい問題であった．

比率はともかく，このように各分野からというのは結構ではなかろうか．

日本建築学会の会長は私の知るかぎり大学人であるし，ASCE の場合はほとんど民間，しかもコンサルタントが多いようである．ちなみに ASCE では，会長，理事すべて全会員の投票による．ただし，われわれの評議員選出と同じく候補者名を示したうえの投票ではあるが，たしか現会長は本部で名を挙げた候補者ではない人が選ばれたはずで，これは注目に値する．

ところでわが学会の英文名は Japan Society of Civil Engineers である．すなわち技術者の集まりである．ところが組織人間を云々されるわが国の特色か，あるいはチームワークを旨とする土木人のゆえか，所属する組織を意識した活動，言動が目立つことが多い．

本来学会は技術者個人の立場で振る舞える場として利用すべきではなかろうか．いま一つ名称に関連したこととして，学会という名から狭義の学界の組織という誤解（？）をもたれる向きがある．これもむしろ英文名の方が理解しやすい．これからの学会活動を考えるうえで蛇足を添えさせていただいた（**第 4 編 3.3** 参照）．

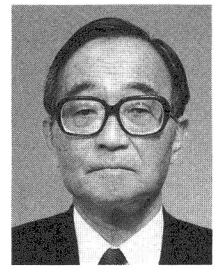
（正会員　工博　埼玉大学教授，東京大学名誉教授）

28. 土木学会特別表彰と国鉄土木技術者

岡 田　　宏

1987（昭和 62）年 4 月の国鉄民営分割により 110 余年の歴史を有した国鉄は新たに JR 各社として生まれ変わることとなった．

国鉄は，土木学会関係者の暖かいご配慮により，学会創立以来その運営と事業の発展に寄与する所が大であったということで，改革実施直前の 87 年 2 月初め，久保慶三郎会長より異例の表彰を頂くこととなった．国鉄末期における鉄道技術部門の責任者として，この受賞は終生忘れ得ぬ思い出の一つとなっている．



表彰の背景には新しい門出を迎えることとなる国鉄土木技術陣を励まそうというねらいも込められていたように思う．

創立当初から土木学会と国鉄は関係が深かった．たとえば学会創立準備会の呼びかけは古市公威（逓信次官，鉄道作業局長等歴任）によってなされているが，鉄道関係者は参集者 17 名中 6 名で，創立年度の主要役員の過半数（14 名中 8 名）を占めている．80 年にわたる歴代会長職に 25 名（3 割強）が就任していることや，学会事務所所在地の変せんにも両者の関係を伺い知ることができよう．

学会の運営面だけではなく会活動の中心である事業，研究においても各地における鉄道の建設や改良に伴う橋梁，トンネルなど多様な鉄道施設の計画，設計，施工を通じ土木技術の進展に協力を重ねてきた．それらの実績は土木学会制定のコンクリートやトンネルの標準示方書類に生かされた．

国鉄が JR に生まれ変わって 7 年が経過した．基幹鉄道の運営形態の変化が鉄道土木技術の発展や学会活動に影響することを危惧しないでもなかったが，それは杞憂にすぎなかったようである．JR を含む鉄道土木グループの活動は鉄道の新たな復権とも称される背景のもと新幹線や都市鉄道など整備促進施策により広範かつ活発に行われている．

そのエネルギーをさらに結集し，国民の期待に応えるとともに土木学会の 100 年にむけて努力を重ねなければならない（**第 4 編 2.2** 参照）．

（正会員　海外鉄道技術協力協会理事長，
前日本鉄道建設公団総裁）

29. 土木技術者に贈るエール

田村　喜子



旭川から北見へ，列車は大雪の山中にもぐりこんでいた．その車窓からかいま見えた原生林の中の細道，あれが囚人道路だと直感したとき，私の心の中に一種の感動がはしった．1896（明治29）年夏，北海道1 000マイル幹線鉄道の実地踏査を行った田辺朔郎が，一人の助手を伴って馬で通った道なのだ．通行人が少なく，草葉のトンネルのようだと，田辺の手記にあった．むらがる蚊虻に悩まされ，樹間を抜ける風の音にヒグマの襲来かとおびえながら，駒を進めたであろう田辺の姿を思い描いたその先に「土木の心」が見えた．

「恵まれないひとたちに，少しでも豊かな暮らしを与えたいとねがって，鉄道を選んだ」と語ったある土木技術者の心を汲みとった瞬間といってもいい．自らはきつくて危険きわまりないところに身を置きながらなお，世のしあわせづくりに携わることに天意をおぼえる土木技術者の在りように触れたのだ．その感触は私にとって想像を超えて快いものだった．この快さを大勢のひとたちと分かち合いたい思いに駈られ，以来土木屋の応援団長を自認している．

応援団長はさまざまな現場を訪れ，最新の技術を見たり，技術者の夢を聞かせていただく機会にも恵まれる．現場の最先端で汗を流す技術者や作業員とじかに接することもできる．そこでは一人ひとりが自分の仕事に自負と誇りを持っていることを感じとれるし，エンジニアは社会発展の原動力であることを身近にする．だからその現場の完成をテレビなどで目にすると，関係者と同じだけの「感動のK」にひたることができるのである．

最近パナマ運河開削や大河津分水補修工事に携わった青山士について資料を繰っていたら，1938（昭和13）年に発表された「土木技術者の信条・実践要項」（本文51頁 参照）の一項目に目がとまった．曰く「土木技術者はその関係する事業の性質上，特に公正で清廉をとおとび，かりそめにも社会疑惑を招くような行為をしてはならない」．

国運の進展ならびに人類の福祉増進に貢献する立場にある土木技術者諸氏に，この信条・実践要項をもう一度読み返していただきたいと，応援団長は願わずにはいられない．

（作家　第1回土木学会著作賞受賞）

30. 琉球大学―その発足と変せん

上間　清



「沖縄は日本戦後史の縮図である」と言われることがある．人文地理的な縮図もないではないが，その主な内容は「占領政治」「米軍基地」など日米関係政治上の「縮図」である．沖縄県民にとって「基地問題」が依然として今日的問題であり続けていることは残念と言わねばならない．琉球大学を語るときも，やはりこの「縮図」は色濃き背景となっており寸述した次第である．

琉球大学の沿革を述べるとき，三つの「節目が必ず指摘される．すなわち「布令大学」(1950～)，「琉球政府立大学」(1966～）そして「国立大学」(1972～）である．民主々義の定着とともに「沖縄の日本からの分離」「共産主義者の排除」までもがその設立理念に含まれた「異様」な状況下での発足（1950年4月）ではあったが，史上はじめて自県に高等専門教育機関「琉球大学」をもった当時の県民や向学の若人にとって大きな喜びであった．

「沖縄の返還なくして日本の戦後は終わらない」佐藤栄作首相の歴史的決意発言は，沖縄施政権返還（祖国復帰）(1972.5.15）に結実し，琉球大学にとっては「布令大学」「琉球政府立大学」から国立琉球大学への移行を実現することとなった．

創立の地は首里王城跡（現国営沖縄公園首里城地区）であった．現キャンパス（千原地区へは1979年に移転完了し，6学部，学生・教官3 500余名のユニバ・ポリスを形成するに至っている．工学部の変せんも大学のそれと連動しており，農

家政工学部実用工学科（1954），農家政工学部（1958），理工学部（1966），工学部（1954）と変せんした．1957（昭和32）年に発足した土木工学科は，94年10月まで存続したが，このとき建設工学科と統合再編し「環境建設工学科」として今日に至っている．

1972年以降は，渡航，人的交流の制限も撤廃され学協会活動への参加も活発化した．土木学会関連の支部大会（西部支部），土木計画学研究発表会，海岸工学研究発表会や土質工学会研究発表会等が沖縄でも開催されている．95年2月には再び土木学会西部支部研究発表会が本地で開催される運びとなっている．

沖縄のもつ自然・社会・歴史にみる特性には多くの学問的関心が示されており，その究明が待たれているものが少なくない．亜熱帯気候下の諸材料特性，台風メカニズムと災害，特殊土壌，海岸リーフ，都市・集落，海外交通など土木工学的関心事も多い．

以上，沖縄の事情を寸述したが，学会80年史にヒストリカルメモランダムの一つとさせていただいたことを幸甚に思う次第である．

（正会員　工博　琉球大学教授　環境建設工学科）

31．土木曼陀羅—関西支部在職35年雑感—

坂上　隆正



昭和30年代は，技術の吸収とプロジェクト実現の高度成長期である．40年代は，低成長期へ入り，社会体制を破壊しようと極左が試み，一方，公害問題の発生，文化財保護が叫ばれ出した時代である．同時に技術者は高度成長の反動として勉学，研修に励んだ時期である．50年代は低成長期からの脱出を図るべく多様化出現の時期であった．60年代から平成初期の時代は，工学一辺倒からの脱皮，市民との対話を見出す土木学発生の大転換期であり，21世紀への第一歩を踏み出した時期と言ってよいのではないか．

これらの流れの中で，支部はその時々の要請，あるいは時代の先取りの行事，新企画，新機軸を次々と打ち出してきた．その原動力の一つとして支部は，会員が対等に自由に語り合える場を常に提供してきたことを挙げることができよう．これは逆に言えば本来的にヒエラルキーはないと言える．これが支部独特のエネルギーを産み出し，常に先駆的役割を果たしてきたと言えよう．

事務局はこれらの動きの中にあって，始めから終わりまで参画し，その動きに添った事務処理をしてきた．役員の新しい感覚に教えられ，過去の経緯ないしは伝統的なことを語り合いながら，いま進むべき道を模索し続けることである．

初代会長古市公威は，土木は工学の総合であると看破されたが，いま土木は工学はもちろんのこと，社会学，経済学，法学，文学，哲学，美学，心理学，宗教学，福祉学，教育学等々を踏まえた土木曼陀羅の実現を要請されている．この汚濁の世の，その中から華咲かす．土木技術者はその素質を充分に持っており，その動き，働き，実践こそ土木学（シビルコスモス）であろう．

最近「いわさきちひろの稚児曼陀羅」を識ったが，この子らの瞳の輝きを根底に持たずに土木曼陀羅は生まれない．人間そのものの原点の見詰め直しを迫られていると思う（**第6編 6.1** 参照）．

（前土木学会関西支部事務局代表）

32．想い出に残る新会館の建設

長沢不二男



創立70周年を迎えた学会の記念事業の最重点は，新会館の建築に決まり，担当する事業部会長という大役が，その当時，学会理事をおおせつかっていた私に回ってきたのは，1981（昭和56）年の秋だったと思います．昭和32年に建てられた平屋の旧館は，既に事務所の面影を失い倉庫化していました．中庭をへだてた場所には，1964年の50周年時に建てられた2階建ての土木図書館がありましたが傷みも激しい状態でした．また，昭和50年前後から土木学会の国際化も急ピッチに進み，

外国要人の来会も頻繁に行われるようになっていました．このような状況のもと「胸を張って外国からの来客を迎えられる会館を是非とも欲しいんです」と当時の川越専務理事をはじめ役員各位の切実な訴えを伺うにつれ，事業部会長をおおせつかった私は，その責任の重大さを痛感したものです．

1957（昭和32）年以来，学会が旧国鉄から借りていた土地は500坪ほどありますが，江戸城の外濠跡や公園緑地指定など様々な制約を受けているため，中高層のビル建築は，不可能であるということが，土木図書館を建設する過程で確認済みでした．会館を新しく改築する際には，図書館と同じく地下室なしの2階建てが許可条件の限界という感触をつかんだ上で，私は個人的に基本設計および積算について下調べを行い，最終的には幹事会社を鹿島建設とする大林組，大成建設，清水建設，竹中工務店の建築大手5社共同企業体へ特命発注することとなりました．5社の担当者の方々を集めた席で私からお願いいたしましたことは，「工事費は各社均等割り，内容は，お委せするが利益なしの実費でお願いし，その上で大手5社の名誉に賭けても立派な建物を作っていただきたい」という誠に虫の良いものでした．

幸いにも，各社の暖かいご理解をいただき，権威ある土木学会のために，当方の意図を十分に汲み取っていただくと共に，簡素な中にも風格のある新会館が完成いたしました．

建築の予算は，図書館の改修費を含めて2億4 000万円，おそらく各社とも採算ぎりぎりの数字だったのではないかと思います．この完成は，70周年全体の募金目標3億円に対し，2億円（鉄建協2 000万円を含む）を負担された石川六郎日本土木工業協会会長をはじめとする両協会幹部のご協力と，当時，民営化で揺れていた国鉄ご当局に対する国鉄OBの方々のご努力，そして，東京都，文化庁などの様々な制約に取り組まれた多くの会員の熱意が実った成果であると思っております．旧館の2倍以上に増床された280坪の新会館は，1984年10月11日に竣工式を終え，現在日本の土木工学の殿堂として，期待どおりに会員各位の交流が図られており，幅広い学会活動の拠点として大きな力を発揮しています．設計施工に苦労され，携われた建築関係の皆さんをはじめ，この実現に協力された関係各位に対し，ここに改めて厚くお礼を申し上げたいと存じます（**第4編2.3** 参照）．

（正会員　(株)竹中土木取締役社長）

33. 土木広報あれこれ

三浦　裕二



学会に広報委員会が創設されたのは1989年のことである．初代委員長高橋裕先生，2代委員長藤井敏夫氏，そして私が3代目．その間5年広報委員会に身をおいた．土木工学が市民のための工学であるにもかかわらず，土木界自らが市民やマスメディアに顔を向け直接語りかける姿勢に欠けていたという反省に立ち，土木の意義と役割について広く国民に理解を深めてもらうことが当面の課題であった．一方で，こうした活動の大切さを会員の大勢に知ってもらうことにも意を注いだ．

そこで，土木界が力を合わせて土木をPRするために「土木の日」を設け，その日を11月18日にした．「土木の日」そのものの提案者は東北大学の後藤光亀先生であるが，それをこの日にしたのは間組に所属する須田忠児委員であった．奇しくもその日が1879（明12）年，工学会創設の日であったことから一気に議論はまとまり，さらに1週間後の11月24日が土木学会創設の日ということで，この運動期間としての1週間を「くらしと土木の週間」と位置づけた．当時「土木」の呼称についても否定・肯定論合わせ活発な議論が行われており，「土木の日」創設を審議いただいた理事会においても，石川六郎会長から「土木」の呼称が変わった場合の対応などについて意見を求められた．この理事会で創設が決定された日，学会主催のもとで「青函ウォーク」という大イベントが高橋委員長，桑原弥介氏らのご尽力により挙行された．

「土木の日」が始められた翌年からの行事は全国の7つの支部の協力を得て全国各地で地域の特質に基づいた多様な行事が展開されるに至り，ややもすれば閉鎖的であった公共事業の現場も広く市民に公開されるようになった．子どもたちにも興味を持ってもらおうと考え出された「土木クイズ」や「現場見学会」，専門家による「講演会」，あるいは「イベント」，「映画会」，さらには「技術相談会」の開催等多彩であり，参加者も年々増加し，1992年度では20万人を越えたことが報告されている．これらの努力により，土木や土木事業がより多くの方々に伝わりはじめるとともに，土木技術者自身や自己を語ることにノウハウを得る楽しい場に育ちつつあると考えられる（**第4編 4.3** 参照）．

（正会員　工博　日本大学教授　理工学部交通土木工学科）

34. 学会誌のカラー化を推進して

岡村　甫



土木学会誌の編集委員長に任命された時に，学会誌の役割，すなわち，（1）会員のために適切な情報を提供し，教養を高めるに益すること，（2）土木学会および土木分野の発展に寄与すること，を忠実に果たすことを考え，編集委員会に以下のことを提案し，検討していただきました．

1)　学会誌と論文集との役割を明確にする．

2)　特集号を別冊として10年間は保存するに値するものとし，一般号は読み捨てとする．

3)　費用は従来と同じ条件で読みやすくするために，活字を大きく，カラーをふんだんに使うが，一つの記事および全体頁を少なくする．

4)　学会誌の目的に合致する新企画を考える．

5)　カレンダーを発行する．このカレンダーをまず会員のご家族に，そしてそこからのネットワークによって，一般の人々に土木の世界の理解を広げる．

これらのことを幹事会および委員会で半年かけて議論していただきました．最初は様々な意見が出ましたが，そのことがかえって編集委員各位の理解を深め，学会誌の編集後記や会員の皆様への記事に見られるように，委員自らが喜んでこの変革に取り組んでいただけました．

歴史への理解を深め，土木技術者としての生き方の参考となるように，「大先輩に聞く」「思い出の現場」を，現状の理解を深め，土木技術者がどのような世界に生きているかを知るために，「技術最前線」「職場ウォッチング」「プロジェクトリポート」「海外土木事情」を，土木学会の一層の発展を意図して，「提言」「New Wave」「明日のシビルエンジニア」を，それぞれ企画実行しましたが，その大部分が5年後の現在も一層充実した形で続いていることを大変嬉しく思っています．

一部の会員からは痛烈なご批判をいただきましたが，おかげさまで多くの会員には喜ばれ，その後の会員数の増加にいささかなりとも貢献できたのではないかと自負しております（**第4，5編** 参照）．

（正会員　工博　東京大学教授，第36代会誌編集委員長）

35. ASCE青函セッションに参加して

藤田　圭一



アメリカ土木学会（ASCE）から，1987年全国大会の国際セッションに参加して欲しい，ただし各国からのプロポーザルの審査結果によるとの打診があった．わが土木学会は，その対応に迷っていたが，土木施工研究委員会でお引受けすることにした．ad-hoc委員会を設けて青函トンネルに絞り，鉄建公団の承認をいただいて応募したところ，11か国中の4か国の一つとして選ばれた．

日本トンネル技術協会から国際シンポジウムの資料の一部引用が許され，海外進出時代のゼネコン各社から暖かい支援を受けることができた．短期間に本文61頁のテキスト“Seikan Tunnel”を作成し，英文の手入れは赤木教授にお願いした．

ASCE全国大会青函セッションは，1987年10月27日，ロスアンゼルス近郊アナハイム市のディ

ズニーランドホテルの会場で開催された．日本側出席者は八木専務理事を始め21名であった．ASCE担当理事の紹介，青函トンネル映画上映，赤木（東洋大），高木（鉄建公団），前田（鹿島），花村（大成），藤田（理大）の講演，質疑応答も含め2.5時間のプログラムであった．出席者は約200名，他国に比べて圧倒的に好評を得ることができた．

本セッションは，前年に来訪されたベイ会長らが仕掛人であったが，現地ではパイロー国際担当理事に大変お世話になった．彼には，技術的レベルの高い大プロジェクトが日本に多いから，毎年特別参加を考慮して欲しいと申し入れた．その後，本四架橋，関西空港などのセッションが実現し，学会誌に詳しく紹介された．なぜか青函セッションは学会誌に無視されたが，『土木学会の80年』に取り上げられ，関係者に対する責任を果たすことができた．

この大会のテーマ『品質』に関する多くのセッションは興味深かった．のちに，品質管理の指針に対して，わが学会の意見が求められたことを付記する（**第5，7編** 参照）．

（正会員　工博　東京理科大学教授，理工学部土木工学科）

36. 関東学院大学土木工学科女子クラスの試み

昌子　住江

関東学院大学工学部土木工学科に女子クラスが設置されたのは1987年4月である．土木の世界へも女性が普通に進出できるよう道をつけること，あわせて新たな視角から土木施設を構想・計画きる人材を育てることをねらったものであった．

ちょうど土木改名論や土木のソフト化が議論にのぼっていた時期でもあり，土木学会誌で折にふれて取り上げられたほか，一般のマスコミでもかなり話題にされた．

公募推薦を中心に学科定員の10％を女子に充てることを原則としたが，実際の在籍数は15～20名程度と学年によって多少バラツキがある．1994年3月までに55名の卒業生を送り出した．

教材では，専門科目として力学系の科目を必要最小限にとどめて計画系の科目を増やすとともに，社会心理学，地方財政といった人文・社会学系の科目を含む構成になっている．他に特別講義としてデザイン論，表現技術論など，外部の専門家を招いて講ずるほか，適宜見学会やワークショップ等への参加を勧めるなどしている．



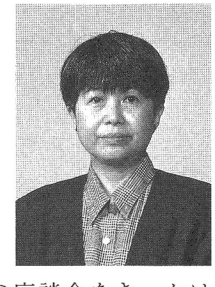
1989年には「全国土木系女子学生の会」も発足した．近年全国の大学・短大における土木系学科に在籍する女子学生は着実に増加している．ここでは年1回の総会や夏休みの現場体験実習，その他関連するイベントへの参加を通し，親睦と経験を深めてほしいと思っている．

問題は女子学生の就職である．女子クラス発足から3～4年は，世の中の好況や男女雇用機会均等法施行直後という事情もあってか比較的順調であった．これまでの実績では，官公庁・公団等20％，建設会社30％，コンサルタント30％強，その他10％といったところであろうか．しかしこの1～2年，民間の採用姿勢は女子に厳しくなっている．一方では女性活用に積極的なところもあるので，企業側と連係をはかりつつ，一つ一つ障害を克服して行きたいと考える．1994年度より名称を計画・環境クラスと改め男子も選択できるコースとなったが，土木界への女性の進出が本格化するまで，なんらかの支援は必要とされよう．

（正会員　工博　関東学院大学工学部助教授）

37. 女性会員と学会活動

関　延子



自分の仕事が「土木」であるという認識を強く持つようになったのはそう古いことではない．土木学会とのかかわりも，会誌を通して垣間見る程度であった．学会が私にとって身近な存在へと変わったのは，1982年9月，誌上の座談会をきっかけとして「土木技術者女性の会」が誕生したことに始まる．その当時，女性土木技術者は女性建築技

術者に比べ圧倒的に少数であり，土木にも女性がいたのかと驚かれるほど珍しい存在だった．しかし，目立つことこそなかったが，彼女たちは仕事を通して堅実にその足元を固めつつあった．座談会はタイムリーな企画として話題を提供するだけでなく，「土木技術者女性の会」を誕生させる引き金となり，80年代後半，土木界に「女性ブーム」が湧き起こる先駆けともなった．会の誕生後は，学会活動にささやかながら女性会員の意見が反映され始めた．誌上に「女性会員からの声」コーナーが設けられ，「レディスフォーラム」へと発展解消していく中で，女性技術者の存在が土木界で認知されるようになっていった．平成2年度全国大会では「ステキな土木へ：女性からの提言」記念シンポジウムが企画され，「全国土木系女子学生の会」と協力して，女性が土木界で働くための問題を討論する機会を得た．シンポジウムは参加者が会場に入りきれないほどの盛況を呈し，その後，いろいろな場所で女性の問題が取り上げられる先鞭をつけた．

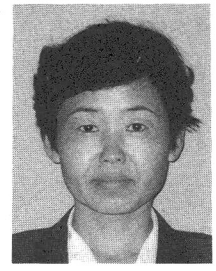
現在，大学の土木科に少数ではあるが女子学生の姿が珍しくなくなり，企業でも二桁の女性技術者を抱える会社も現れた．年次学術講演会にも女性の発表が少しずつではあるが増えており，これら女性技術者育成に学会が果たした役割ははかり知れない．土木界がよりいっそう女性に開かれることを願うと同時に，女性技術者自身の真価が問われていることも忘れてはならないだろう．

（正会員　攻玉社工科短期大学助教授，土木工学科）

38.「山の神」に見守られ

正木　啓子

振り返れば「土木」との付き合いは，他の何よりも長くなっている．漫然と「土木」に憧れるようになったのは，神戸市で育ったことが大きく影響している．土木屋原口忠次郎氏が戦後20年にわたり市長を勤め，新しいアイディアのもと，街づくりを推進する様は，「山・海へ行く」と形容された．当時の時代背景が，戦後復興期から高度成長期の開発指向の真只中であったにしろ，目前で繰り広げられる大規模土木事業は，若い目に新鮮で憧憬の念を抱くのに充分であった．したがって，ごく自然に「土木」を学び，当然のこととして土木行政の第一線である地方公務員を希望した．



大阪府採用試験の面接のやりとりは今でも覚えている．「地方自治法を知っていますか」「いいえ」「では，地方公務員法は？」「知りません」一体なぜ法律のことを土木屋に質問するのだと，憮然とした新人の初仕事が，改正されて幾許もない都市計画法であるとは．

恥ずかしながら，土木行政の基本に法がありそして民意があると心の底から悟るのは，しばらく後のことである．

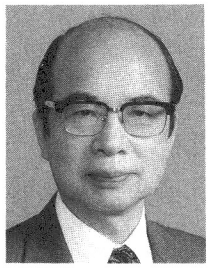
「土木工学は，日常生活をあらゆる方面から多岐に支えている実践的学問と言われるが，土木行政の間口の広さは，想像をはるかに越えるものがある．そこでは単に技術論だけでなく，住民の生活再建や税対策まで諸々の知識とそれを説明しうる感性を必要とする．私自身も二十年余りの公務員生活を経て，なお新しい経験の毎日である．

ところで当時の採用試験は『土木職（男子のみ）』の制限が当たり前であった．このため何とか入庁した後も私が仕事に馴れるのと併せて，周囲に私＝女性に馴れていただく必要があった．それでも，トンネルなどの現場視察，夜間工事，防災などに当たり，これまでのところ「山の神」に嫉妬もされず静かに見守っていただいている．偶然にも11月18日 土木の日 生まれの私に対する「山の神」の暖かい心を信じ，今後も心して事に当たりたい．

（正会員　大阪府茨木土木事務所建設課主幹兼企画調整係長）

39. 四国支部の独立

河野　清



1995（平成7）年4月から土木学会中国四国支部が分離して，中国支部と四国支部が創設されることになりました．会長をはじめ会員の皆様のご理解とご支援に対しまして，心から厚くお礼を申しあげます．

思えば四国支部の独立運動には長い道程がありました．最初の動きは1974（昭和49）年ころで，飯塚局長（四国地建），今は故人の星・荒木両教授（徳大），安山教授（愛大）らが運動されましたが時期尚早で流れ，小田・杉尾両教授（徳大）に引き継がれ，1984（昭和59）年，中西局長の時に再び支部独立の動きがありましたが見送られています．

一方，日本建築学会（1949年），土質工学会（1959年），日本建設機械化協会（1975年）等，建設関係の学協会，機械・化学以外の他の学会などは四国支部をつくり活発に活動を行っている現実があり，特に，昭和63年4月には本四連絡橋児島～坂出ルートが開通して四国が脚光を浴び，地方の時代が叫ばれる中で，佐藤局長，定井教授（徳大），八木教授（愛大），椎野専務（四電技術コンサルタント）らが中心となり産官学一体となって独立運動が再開されました．

1990年には支部内に四国支部創設に関する特別委員会が設置され，翌年から検討を開始するとともに中国と四国とに分かれ部会活動を積極的に行うなど本格的に分離，独立へ向けての取組みが進められました．

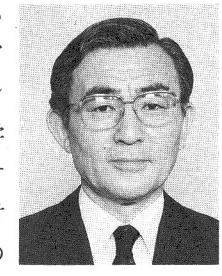
1992年度，森支部長（岡大）の時に支部会員に対するアンケート調査実施の結果，81％の賛成があり，93年5月の支部総会で分離・独立が承認されました．同年6月の理事会で審議され，企画調整委員会で検討ののち11月の理事会で認められました．94年5月の第80回通常総会で規約改正を含め承認されて正式に独立の運びとなり，1995年9月下旬には四国支部として松山市において第50回土木学会年次学術講演会を含む全国大会が開催できることになりました．これまでの関係者の方々のご尽力に対して深く感謝しております．

四国支部独立後は，地域に密着したきめ細かな学会活動を進めて行く所存ですので，会員の皆様の一層の御支援をお願い申しあげます（**第4編 3.1** および **第6編 1.9** 参照）．

（正会員　工博　徳島大学教授，土木学会副会長）

40. 80周年演奏会の音楽監督をつとめて

中瀬　明男



土木のエンジニアが集まってヴィヴァルディやモーツアルトを奏くと言っても，ピンとこないであろう．それが学会80周年記念式典で実現することになった．これは中村英夫学会長の発案によるもので，40年来チェロを楽しんでいる筆者がその取りまとめをすることになった．

楽器演奏に関する学会員の状況が分からないので，小人数でもある程度可能な弦楽合奏を計画し，最近10年間に定期的な合奏の経験のある者と限定して，平成5年夏の学会誌に募集記事を載せた．年末までに楽器別のバランスのよい17名の会員が集まった．

よい合奏の決め手はコンサートマスターであり，これは演奏技術が高いだけでは勤まらない．最初の練習で初対面のメンバーが椅子に着く段になって，ヴァイオリンの一人が当然のようにコンサートマスターの席に座り，基準のAの音を440ヘルツという筆者の要望に対して442にして貰いたいと言ったのを聞いて，これなら大丈夫と安心した次第である．

学会員の中に優れたコンサートマスターが存在したことは幸せであった．

メンバーはすべて会社勤めの方であり，17名中の6名が京都大学のオーケストラの出身で，各パートのトップも彼らが受け持っている．各メン

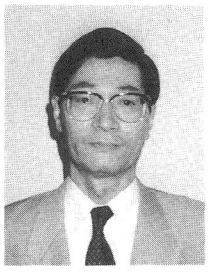
バーは現在も地元のオーケストラに積極的に参加しており，仕事と趣味の両立を強烈に追求していることが共通している．

これまでの筆者の見聞からすると，今回の土木学会のメンバーは間違いなく第一級の筋金入りのアマチュアである．彼らは独奏よりは合奏に大きな喜びを感じているようであるが，これは集団として仕事を仕上げるという土木技術者の特性に通じるものがあるように思われる．学会としては特異なものではあるが，この合奏団・アンサンブルシビルの活動が今後の学会の広報活動の一端に貢献できるのではないかと思っている次第である（**第4編 4.2** 参照）．

（正会員　工博　(株)日建設計特別顧問，東京工業大学名誉教授）

NHKスペシャル・ 41．テクノパワーを終えて

高木　不折



1993年8月より12月にかけて5回にわたって放映されたNHKスペシャル・テクノパワーは，平均11%強の視聴率で大変な好評を博した．土木学会はこの番組を80周年記念事業の一つに位置づけ，情報・資料の提供またC.G.の提供に全面的に協力したが，今回の成功は，これに参画したあらゆる方々の“熱意”によるものであった．その経緯あるいは番組への反響などについては，学会誌，1993年2月・4月号の座談会に詳しい．

さて，最近，土木に関する事柄がマスメディアに取り上げられるとき，往々にして環境破壊などといったマイナスのイメージのものが多く，土木にかかわる我々はマスメディアに対して，かなり神経質になっていたきらいがある．私自身もジャーナリズムの人々に，一面的に考えず，プロジェクトの全体像の中で考えてほしいと話したことは度々である．

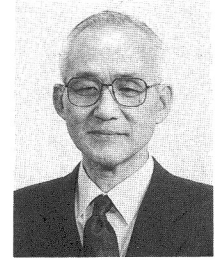
社会資本のもたらす恵みは，単にどれだけの水量や，電力が得られるということでなく，極めて広い意味で，長期にわたって社会とその活動を支える．そして，それこそがプロジェクトの全体像だとわれわれは訴えがちである．しかし，今回の資料・情報収集の過程で，一つの事業のもたらした悪い結果のデータはあるものの，良い結果のデータは非常に少ないことに気付いた．良い面の評価には，莫大な経済連関分析を必要とするからだけだろうか．

今から百数十年前，フランスの土木公団のエンジニアは，土木事業の意義を世に訴えるために，土木事業の評価法を生み出し，それが公共経済学に発展したという．これからの土木事業も一般民衆の理解なくしては成り立たない．今後の土木には，時代を超越した哲学が必要だともよく言われるが，それも観念的なものでなく実体を伴ったものでなければならないであろう．将来に向けて心するべきだと思う（**第4編 4.2** 参照）．

（正会員　工博　名古屋大学教授　80周年記念事業・イベント部会長，テレビ小委員会委員長）

42．平成6年度日本学士院賞を受けて

角屋　睦



土木学会創立80周年に当たる本年度に日本学士院賞を受賞したことから，何か一文をという編集委員会のおすすめを受けて，駄文を草することにいたしました．

私は，京大防災研究所に長らく勤務し，多くの方のご支援をいただいて，災害関係の仕事に専念してきただけに，私より立派な業績を挙げてこられた先生方が沢山おられることを思うと，全く過分の事であり，前々の京大総長沢田敏男先生（学士院会員，昭62学士院賞，ダム工学）の強いご推薦をいただいたお蔭とはいえ，僥倖であり，有難いことだと思っております．

受賞対象は，「極値水文学の展開と水利施設計画設計への応用に関する研究」で，水文統計・洪水渇水予測・都市化水文の研究が主内容となっております．

最も苦労したのは，やはり統計的手法の研究で，

電子計算機の未開発時代とて，数表作りに手回し計算機と対数表が唯一の武器でした．当時貴重な文献であった20桁の対数表の一部を数学教室の図書室で見つけたときは，地獄で仏に会った思いでした．

そのころ，確率論や統計学で著名な，伊藤清（学士院会員，昭53恩賜賞）・奥川光太郎・小河原正巳の先生方に貴重なご指導をいただいたことを忘れ得ません．土木では，石原藤次郎・石原安雄・山岡勲・室田明の各先生方から，ご理解と有益なご助言をいただきました．

水文統計に関する初期の研究は，土木学会水理委員会水工学シリーズ64-02にまとめておりますが，これをミスプリントまでそっくり盗用して本を書いた大学の先生がいたのは，大変なショックであり，悲しいことでした．

最初に申しましたように，今回の受賞は私にとっては全く過分のことですが，これからの若い世代の方の刺激になってくれれば幸いと考えております（**第7編 1.2** 参照）．

（正会員　農博　京都職業能力開発短期大学校長，京大名誉教授）

おわりに

本編への寄稿依頼に対し，体調を崩し執筆困難と回答（5月18日）があったのは星埜和名誉会員だけである．その後入院され94年6月11日に逝去された．戦後の49年から51年にかけて，ようやく月刊となった学会誌編集委員長をはじめ学会とのつながりが深く，豊富な話題を期待していただけに残念である．心からご冥福をお祈りいたします．